

令和7年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価 (3月27日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	①インクルーシブ教育実践推進校としての取組を軸として、授業のユニバーサルデザイン化を推進する。 ②組織的な授業改善を重ねることで、生徒の学習意欲を喚起し、基礎学力の定着を図るとともに、「自ら学び続ける生徒」を育てる。	①すべての生徒を対象としたユニバーサルデザインの視点での授業実践を組織的に推進し、その効果を研究する。 ②一人一台端末の活用方法について、教員間での情報共有を行い、生徒が主体的に学習に取り組めるよう手助けする。	①教科や学年で教材の共有化を推進しながら、生徒全員が理解を深めることができるようユニバーサルデザインを意識した授業を実践する。 ②一人一台端末の有効活用を研究し、生徒の意欲を喚起し、主体的に学習に取り組む態度を育成する。	①年間を通して、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を組織的に見直し、改善することができたか。 ②端末の活用状況を含め、授業見学を教科横断的に行い、授業研究会を通して授業の最適化を図ることができたか。	①定期試験の弱視対応など、ユニバーサルデザインの視点で組織的に見直し、改善することができた。 特募生対象の社会生活の授業において生徒を様々な視点でアセスメントする授業案や教具を整え、その他の授業にも展開することができた。 ②端末の活用状況の充実に加え、新たに導入される採点システムの効率的で効果的な運用を模索し、生徒の学習に取り組む態度を醸成する。	①引き続き多様なニーズの把握に努め、ユニバーサルデザインの視点で組織的に改善できる体制をつくる。 社会生活の授業での生徒の困り感や手立てを個別教育計画や定期的なインクル研修を通じて、学校全体で情報を共有する。 ②端末の活用状況の充実に加え、新たに導入される採点システムの効率的で効果的な運用を模索し、生徒の学習に取り組む態度を醸成する。	①情報機器の進歩で情報があふれる現代で、生徒が物事に主体的に取り組むことが難しくなっている。様々な仕掛けを工夫し生徒に働きかけをして生徒の学習環境を整えていることは評価できる。 ②上級学校や義務教育でもICT機器の普及が進んでいるが、AI等から安易に答えを見つけるだけでは本当の知識として身につかない。自ら考え、解決する力を身につけてほしい。	①授業のユニバーサルデザインの視点を充実することや合理的配慮のあるテストを実施することで、生徒にとってより良い学習環境を構築することができた。一方で過剰な支援になっていないのか常に振り返り、他のユニバーサルデザインの視点は無いのかなど継続的に追究していく必要がある。 ②授業中に行う発表や、課題研究を行う際の情報ツールとして一人一台端末の利用は着実に増加しているが、使い慣れた情報ツールとしてのスマートフォンを手放せない生徒が想定以上に存在する。	①これまでの校内体制づくりにおける蓄積から明らかになったことや理論的裏付けのある知見を根拠に引き続き校内体制のメンテナンス・アップデートを行う。特に授業のユニバーサルデザイン化におけるキーワードとして「視覚化」「焦点化」「共有化」、時空間における「構造化」に着目していく。 ②新たに導入される採点システムによるテスト返却を含め、一人一台端末を使用することを前提とした学習内容の構築を目的とした情報交換を行う。
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	①「生徒支援」の観点から、安全・安心な学校生活を保障する。また、教育相談体制を充実させ、生徒のサポートを徹底する。 ②自己表現・自己実現ができる豊かな人間性を育むため、学校生活の中で生徒が活躍し、成功体験を積み機会を設定する。	①すべての生徒に対し、指導と支援を切り離すことなく、一人ひとりの生徒に対して、組織的に向き合っていく。 ②学校行事や部活動等に主体的に参加する生徒を増やし、生徒自ら実践・振り返りを通して達成感を体感させる。	①かながわ子どもサポートドックや定期的な個別面談を活用し、学校生活に困り感のある生徒の早期発見・解決につなげていく。 ②新入生部活動加入率65%以上、全体加入率55%以上を目指す。行事における自身の役割を自覚させ、生徒自ら考え、実践する力を養う。	①かながわ子どもサポートドック等の教育相談を充実させ、積極かつ迅速な支援につなげることができたか。 ②部活動加入率で目標が達成できたか。各種行事において、意識の変容や達成感を数値により評価が向上したか。	①かながわ子どもサポートドックの活用を進め、生徒との面談機会を増やした。生徒の困り感の早期把握につながり、教育相談体制の充実を図った。 ②新入生部活動加入率は68%を達成できた。全体加入率は54%だった。文化祭事前の「やる気あり」は69%だったが、事後は75%が「充実・満足」と意識向上が見られた。	①SC、SSWとの連携がスムーズに行っているが、教員側も含め、担当者が変わった場合の引継ぎや対応での更なる均質化が必要である。 ②次年度以降の部活動加入率アップに向け、今年度から準備していく。各種行事の事後アンケート結果を精査し、次年度への改善に反映させていく。	①生徒の支援に様々なアプローチを行っていることが伺えた。生徒が抱える問題は、家庭の問題が多く占められると思われる。学校でできる支援を伝えながら取組んでほしい。 ②価値観の多様化や教員の働き方改革等の背景から、部活動の参加率を上げていくことが難しいと感じる。一方で、何かに所属し、そこで学ぶ責任感や人間関係など大きな意義がある。そのまま推進してほしい。	①かながわ子どもサポートドックの運用が生徒、教員ともに定着し始め、教育相談の充実につながることができた。多様な生徒支援への方策を構築できているが、どの方策でも困り感を伝えられない生徒が一定数存在している。 ②主体的に部活動に加入し、様々な体験を積みながら実績を残す生徒が増えてきた。また体育祭や文化祭でも主体性や達成感、先輩後輩など、クラスを越えたつながりや社会性を身につける機会にもなっていると感じる。近年の物価高により、費用面で行事や部活の支援が厳しくなっている。	①担任、学年教員、養護教諭、SCやSSWとの連携を強化し、さらに合理的で効果的なものとなるよう検証や実践事例の共有など校内で組織的に進めていく必要がある。また、確実な引継ぎや他校での取組を参考にすることにより改善していきたい。 ②委員会の活動を、部活動未加入生徒や学校行事に消極的な生徒の主体性や成功体験を積み場としていく。 生徒会費の用途について精査し、無駄を省き、本当に必要な所に予算を充てていく。また、長い間据え置かれていた生徒会費の値上げについても検討していく。
3 進路指導・支援	①生徒一人ひとりが自己理解を深め、職業観や勤労観を養うことで、主体的に自らの将来を考える姿勢を育てる。	①多くの進路行事を通じて、生徒に職業観・勤労観を身に付けさせ、将来像を考えさせる。	①「総合的な探究の時間」を活用するなど、生徒のキャリア発達に資する支援をおこなう。	①様々な特性のある生徒の実情を踏まえ、生徒一人ひとりに寄り添ったキャリアプログラムを計画し、生徒に達成感を与えることができたか。	①3年生に向けてアンケートを実施し、その結果、生徒の進路決定に「探究の時間」が「影響した」と答えた割合が5割を超えたことができた。	①1、2年生にも同様のアンケートを実施し、今後の計画の参考にしていく。また、実践的かつ体験的な内容を生徒が求めていることが分かり、今後の課題としていきたい。	①「分かる授業」も大切だが、「分からない」ままでも、探究活動からその解決に向かう姿勢を身につけることが、将来の自分の未来を切り開く力に結び付くだろう。	①3年生での進路決定の際に「探究の時間」で実施していた内容が良い影響を与えたことが分かった。今後「探究」のプログラムを考えていくうえで、参考にしていきたい。また、課題としては、「探究」の内容をより実践的かつ体験的な内容に改善をしていくことが課題として挙げられた。	①改善策としては、「探究の時間」のプログラムを提携している学校等を活用し、生徒が主体的に参加し、より実践的かつ体験的な内容にしていく。中長期的にみて、生徒自身が課題を発見し、探究していく内容を考えていきたい。

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月27日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
	②キャリア教育の柱として、高校卒業後の将来設計を考えさせる探究活動を重視する。	② 外部教育機関との連携及び様々なコンテンツを活用し、生徒のキャリアデザインを構築する支援を行う。	② キャリアガイダンス、「総合的な探究の時間」の有効的な活用方法を考察し、生徒に還元できるコンテンツを考える。	② 様々な特性を持つ生徒に有効なキャリアガイダンス、進路行事等を年2回以上実施することができたか。また、生徒の満足度が8割を超えたことができたか。	②進路行事は年3回実施することができた。形式を変化させることで、生徒たちが主体的に受けることができていた。また、それぞれの行事での生徒の満足度も高かった。	②回数は、年間予定を考えた時に3回から4回が適していると思われる。また、内容をより精選して、生徒がより主体的に参加できる内容に更新していきたい。	② 良い取組を行っている。生徒の視野を広げる取組を推進してほしい。進路行事を年間で3・4回実施するのは、大変だと思うが、貴重な機会となるので、ぜひ続けてほしい。	③ 年3回実施しているガイドランスについては、学年に合わせた内容を実施することができた。これからも継続して実施していく。課題としては、生徒がより参加できる内容を考えていきたい。	②回数に関しては、3回から4回が本校の年間スケジュールを考えると妥当といえる。改善方法としては、それぞれのガイドランスの内容を事前に把握し、生徒が参加できるポイントを探して、参加できる機会を設けるようにしていく。また、回数については、スケジュールに空きがあれば1回加えて、4回実施できるとよいと思われる。
4	地域等との協働 ① 学校運営協議会(コミュニティ・スクール)を中心に、協働的・双方向的な学校づくりを推進する。 ② 地域への貢献と、地域資源の活用を両立させ、「地域社会とともに育ち・伸びる学校」をめざす。	①持続可能な学校づくりをめざし、教育活動の情報を発信し、本校の魅力や課題を共有する。また、本校の活動にプラスとなる資源について情報を収集し、改善につなげる。 ②「地域の中の学校」として、地域貢献活動を充実させるとともに、教育連携を締結している上級学校を活用し、生徒の資質向上を図る。	①教育活動の成果を発信するとともに、外部からの意見を聴取し、本校の取組をさらに充実させ、本校の魅力をアピールしていく。 ②効果的な活動とするため、現行の地域貢献活動を精査する。また、教育連携先を整理し、教育人材を派遣してもらうことで、生徒の進路活動及び、教職員の研鑽に生かす。	①定期的なホームページの更新や、学校説明会を活用して、最新の情報を保護者や中学生、地域住民に提供することができたか。 ②地域の企業や自治会、教育連携先の人材資源を活用し、地域貢献活動や授業を充実させることができたか。	① ホームページの運用については、担当を明確にし、定期的にデータ更新の依頼を行った。学校説明会だけでなく、文化祭を一般公開し、学校の取組を理解していただけるよう、生徒の活動の様子に触れる機会を提供した。 ②桜美林大学と連携し、広い視野をもたせたキャリア教育を実践した。また、NPO法人ピルコンに依頼した性教育講座では、現実的で身近な題材を用いて、生徒に考えさせる機会を提供できた。	①ホームページの更新は、部署により温度差があるが、引き続き管理の方法を構築していく。タイムリーで内容の深い情報提供を目指していく。そのために日々の生活や各種行事の記録を保存する担当を明確にする。引き続き、地域の方々へ本校の様子を発信していくが、来年度40周年を迎えることをうまく盛り込んで対応していく。 ③ 本校生徒に効果的な教材を提供するために、引き続き外部資源の情報に目を向ける。	① 個人情報の関係で、条件が厳しくなっている現状だが、一方で保護者の関心は高まっている。進学の際の学校選択においても、保護者の意向が強く反映されているように感じる。今後いっそうの正しい情報をタイムリーに発信する取組を推進してほしい。 ② 地域としてどんな協力ができるのか考えると、高齢者福祉や選挙ボランティアなどで地域と連携して、生徒に体験させることなど考えられる。検討してほしい。	① ホームページの管理、運用については、これまでより適正に対応できるようになった。今後、安定的に運営していくために、その運営方法を具体的に構築し、さらに機能的な情報発信ができるよう、レイアウトや仕組みなど、全体的な視野で内容を厳選していくことを課題とする。 ②既定の校内教育活動の場面では、外部講師を活用することで高い効果をあげることができたが、活かせる外部資源を活用していくという方向で、活動の幅を広げることができているかが、今後の課題と考える。	①ホームページを、学校の日常や、取組の様子を発信だけでなく、本校生徒と保護者、また、地域や学校関係者以外の方々から求める内容を提供するツールにするため、そのニーズの収集と、学校運営協議会の意向を反映させるための手順を構築することに努めていく。 ② 地域への貢献と、地域資源の活用を両立させるための、情報収集が必要と考えるが、それを行うための具体的な手立てを明確にして、計画的に実践していくために準備を進める。
5	学校管理 学校運営 ① ユニバーサルデザインの観点から、学校全体を検証し、すべての生徒にとって安全・安心な学習環境を整備する。 ② 全職員が学校運営上の課題を共有することで、事故・不祥事防止の徹底を図る。	① ユニバーサルデザインの観点で学習環境の評価・検証を定期的に行い、生徒にとって安心・安全な学校づくりを推進する。 ② 職員が学校全体を見渡す視野をもち、共通の意識で課題解決に向かうことで、事故・不祥事ゼロを実現し、協働的で働きがいのある職場環境をつくる。	① インクルーシブ教育実践推進校として、ユニバーサルデザインの観点を確立し、定期的に生徒の学校生活を支援する。 ② 事故・不祥事の起こりやすい時期に有効な情報を職員で共有し、コミュニケーションを大切に、風通しの良い職場にすることをめざす。	① 教育活動に係る環境を教職員が定期的に点検し、課題や予見できる事象について共有し、改善することができたか。 ② 各自の業務を組織として点検する体制を構築し、事故・不祥事ゼロを達成できたか。また、月2回以上事故・不祥事防止に係る情報を職員に提供できたか。	① 定期的な職員会議でのインクルーシブ教育研修を通じて、チームティーチングやICT活用についてノウハウを共有することができた。 ② 定例の職員会議の際に事故・不祥事防止会議を実施し、毎日の打合せ時にも時期に応じた注意喚起を行った結果、大きな事故・不祥事を防ぐことができた。	① 新しく導入された電子黒板の活用についてさらに研究し、誰もが学びやすい教育環境を構築するために常に最新の情報を参考にしていく。 ② 事故・不祥事防止を常に意識できるよう、業務の進め方から改善するよう努める。	① 生徒の生成AIの利用が止められない現状の中、新しい学習環境に応じた指導をお願いしたい。城郷のポリシーは何かを明確にすると良い。 ② 事故・不祥事防止については、今年度事故・不祥事が発生しなかったことは評価できる。引き続き取り組んでほしい。	① インクル研は今年も12回を超えて実施することができた。特別募集で入学する生徒だけでなく、全ての生徒がどのような場面で困難があるのかを教科の専門性からアセスメントし支援計画や授業計画に反映させていく校内体制を継続することができた。電子黒板などのハード的なICT活用とともに、生成AI活用におけるメリット・デメリットを検討したうえで授業に活用していく方策を研修していく。 ② 定期的な事故防止会議においてその時期に適切なテーマで実施することで、効果的に注意喚起ができ、大きな事故・不祥事を防ぐことができた。	① 継続的にインクル研を実施していくとともに、シチズンシップの視点やICTの視点も取り入れた研修を実施していく。生成AIに関しては特別募集の生徒にとって第1歩のハードルを下げることや、個別最適化の学習における先生役としての機能が見込まれる。各教科の専門性の中で共通化できるノウハウを蓄積していく。 ② 引き続き事故・不祥事防止を常に意識できるよう、注意喚起と業務の進行と連携しながら、業務の進め方も含め改善するよう努める。